

大楠公

落合直文作詞
奥山朝恭作曲

1 青葉茂れる桜井の
里のわたりの夕まぐれ
木(こ)の下陰(したかげ)に駒とめて
世の行く末をつくづくと
忍ぶ鎧(よろい)の袖(そで)の上(え)に
散るは涙かはた露か

2 正成(まさしげ)涙を打ち払い
我子(わがこ)正行(まさつら)呼び寄せて
父は兵庫へ赴かん
彼方(かなた)の浦にて討死(うちじ)にせん
いましはこまで来(き)つれども
とくとく帰れ故郷(ふるさと)へ

3 父上(おとうさま)にかのたもうも
見捨てまつりてわれ一人
いかで帰らん帰らん
この正行(まさつら)は年(とし)こそは
未(いま)だ若(わか)けれ諸共(もろとも)に
御供(おんとも)仕(つか)えん死出(しで)の旅

4 いましをこより帰(かへ)さんは
わが私(わたくし)の為(ため)ならず
己(おのれ)れ討死(うちじ)さんには
世は尊氏(たかうじ)の儘(まま)ならん
早く生(なま)い立ち大君(おほきみ)に
仕えまつれよ国(くに)の為(ため)

5 この一刀(ひとつり)は往(い)にし年
君(きみ)の賜(たま)いし物(もの)なるぞ
この世(よ)の別れ(わか)れの形(かたち)見(み)にと
いましてにこれを贈(くわ)りてん
行(い)けよ正行(まさつら)故郷(ふるさと)へ
老(おい)いたる母(はは)の待ちまさん

6 共に見送り見返りて
別れを惜む折(せ)りからに
復(また)も降り来る五月雨(さみだれ)の
空(そら)に聞(きこ)ゆる時鳥(ときどり)ほととぎす
誰(たれ)か哀(あはれ)と聞(きこ)かざらん
あわれ血(ち)に泣(な)くその声(こゑ)を

大楠公

1

青葉茂れる桜井の
里のわたりの夕まぐれ
木(こ)の下陰(したかげ)に
駒とめて
世の行く末をつくづくと
忍ぶ鎧(よろい)の
袖(そで)の上(え)に
散るは涙かはた露か

大楠公

2

正成(まさしげ)

涙を打ち払い

我子(わがこ)

正行(まさゆき)ら呼び寄せ

父は兵庫へ赴かん

彼方(かなた)の浦にて

討死(うちじに)せん

いましは(いま)も

来(きこ)れども

とくへ帰れ

故郷(ふるさと)へ

大楠公

3

父上いかにのたもうも
見捨てまつりてわれ一人
いかで帰らん帰られん
この正行は年こそは
未(いま)だ若けれ
諸共(もろとも)に
御供(おんとも)
仕(つか)えん
死出の旅

大楠公

4

いましをこより帰さんは
わが私(わたくし)の
為ならず

己れ討死為さんには
世は尊氏(たかうじ)の
儘(まま)ならん

早く生い立ち大君に
仕えまつれよ国の為め

大楠公

5

この一刀(ひとふら)は

往(いに)し年

君の賜いし物なるぞ

この世の別れの形見にと
いましにこれを贈りてん
行けよ正行故郷へ

老いたる母の待ちまさん

大楠公

6

共に見送り見返りて
別れを惜む折りからに
復(また)も降り来る
五月雨(さみだれ)の
空に聞こゆる

時鳥(ほととぎす)
誰れか哀(あわれ)と

聞かざらん

あわれ血に泣くその声を